

番号	質問内容	回答	参考資料
1	鹿児島では結婚式等の祝事の前に雨が降ると「島津雨」といって喜ばれるそうだが、由来を知りたい。	忠久公の誕生時、大雨が降り、真暗の晩であった。その大雨のため、出産時の汚物等は洗い流され、狐火が出産を助け、つつがな産事も済んだことから、何かの仕事をするときの吉兆としている。	『鹿児島県郷土史大系3巻』 『ふるさと加世田の史跡』
2	鹿児島に伝わる昔話で、天文に関するものには、どんな話があるか。	①天人女房、太陽と月、天道さん強い綱、手なし娘 ②太陽と月の始まり ③太陽のクメダナシ	『日本昔話通観・鹿児島』 『大和村の昔話』『瀬戸内町の昔話』
3	年祝いの米寿を鹿児島では、女性・・・いとよいゆえ 男性・・・とかぎはい、とかぎゆえ と言うそうだが、どのような意味があるか。	①いとよいゆえ 糸縫祝・・・女性の米寿の祝。自分でよった糸を配る。 ②とかきいわい 斗掻祝・・・(斗掻きを祝い客におくるところから)八十八歳の祝い。	『日本方言大辞典上・下』小学館
4	薩摩の三寺とは何か。	坊津・・・一乗院 志布志・・・宝満寺 鹿児島・・・慈眼寺	『鹿児島県の地名』
5	島津家庭学校とは、どのようなものか。	島津家庭尋常小学校と言い、島津忠重とその兄弟のための学校。	『炉辺南国記』 『しらゆき』
6	六月灯の由来について	光久の時代に始まる。光久は上山寺新照院観音堂に多くの灯籠に火を点ぜしめたので、檀徒もならって多くの灯籠を点じ、にぎわったの毎年の行事となった。島津家久公に跡継ぎの男子が生まれず、京都の観音さまに祈願したところ男児が生まれた。(のちの光久公)島津家ではこれを祝して、六月十八日に城中の観音様に美しい灯籠飾りをして喜びあったのが、始まり。	『三州S42. 6月』 『鹿児島のおいたち』 『郷土資料2 草牟田校区史』
7	ラーフルの語源。方言か。	仏語、英語、蘭語等 諸説が有る。全国的に使われている業界用語であり、方言ではない。	『薩摩の国学』 『南日本新聞 平成元年5/5, 5/8, 5/10, 5/15, 10/10, 10/31』
8	チェストイケの意味・由来	・使命にむかって突撃するときのかけ声 ・しっかり、頑張れ、うまいぞ等の意 ・感動したとき、紅潮したとき発するかけ声語源は未詳。江戸末期頃、鹿児島地方から流行した。	『さつま今昔』 『新さつま語の由来』 『日本国語大辞典13巻』

番号	質問内容	回答	参考資料
9	「茶わん虫の歌」とは、どんな歌詞か。	♪ うんだもこら いけんなもんな あたいがんどん 茶わんなんだ 日に日に 三度もあるもんせば きれいなもんぐわんさ 茶わんに ついた虫じゃろかい めごなど ケ歩く虫じゃろかい ほんに げん ねこじゃ ワッハッハ ♪	『南日本民謡曲集』 『南日本新聞昭和47. 6. 19 平成10. 6. 27』
10	薩摩の三つの山陵はどこにあるのか。	三山陵と言われ、明治7年、政府が川内の可愛山陵、溝辺の高屋山陵、吾平の吾平山陵を指定。	『かごしまの郷土の歴史と物語』 『神代三山陵に就いて』
11	げたんはの由来について	下駄の齒の形容だが形からして三角ともいわれている。また、昔、横川菓子とも呼ばれていた。	『さつまの味めぐり3』 『薩摩あま・から』
12	郷土料理「ねったぼ」とはどんな料理か。	芋と餅を一緒に蒸し、練り上げて丸め、きな粉をまぶしたおやつ。 材料・・・からいも、もち、きな粉(きな粉、塩、砂糖)	『私の鹿児島料理』 『日本のふるさと鹿児島郷土料理 全書』『さつまの味めぐり3』 『わたしたちのふるさとの味』
13	西郷隆盛が好んだという「敬天愛人」の言葉の意味について	西郷隆盛の「敬天愛人」は、「天をうやまい、人を愛する」という意味である。ところが、その由来については、①西郷隆盛の造語であるという通説に対し、②この「敬天愛人」は、西郷隆盛以外の者の言葉から西郷隆盛が採用したという説がある。	『敬天愛人第9号』 『敬天愛人第2号』 『鹿児島大百科事典』 『鹿児島随筆No36～43』 『日本名言名句の辞典』
14	東市来町の宮田石は、日本三大名石の一つと言われているのは事実か。また、ほかの二つはどの地方の何という石か。	岩手県衣川の菊花石、京都府鴨川の盆石、鹿児島県東市来神ノ川の宮田石	『三州談義No. 85』 『朝日新聞昭和39. 6. 10』 『南日本新聞昭和35. 7. 10』

番号	質問内容	回答	参考資料
15	集成館事業とは何か。	嘉永4年(1851年)島津斉彬が、集成館や集成館以外の場所に起こした反射炉、熔鋳炉、鑛開台、ガラス工場、鍛冶場、蒸気金物細工所、鍋釜製造所、洋式船建造、蒸気機関製造、紡績、電信、製菓、印刷などの事業。	『島津家おもしろ歴史館2』 『島津斉彬の挑戦—集成館事業—(かごしま文庫73)』 『島津斉彬の全容』 『三州談義No. 77』 『集成館事業のすべて』
16	薩摩藩留学生の人数、名前、出身地について	新納久修、町田久成、松木弘安(のちの寺島宗則)、五代友厚、村橋直衛、畠山義成、名越時成、鮫島尚信、田中盛明(のちの朝倉盛明)、吉田清成、中村博愛、市来和彦(松村淳蔵を本名とする)、東郷愛之進、森有礼、町田実積、町田清次郎、磯永彦助(のちの長沢鼎を本名とする)、高見弥一、堀孝之 以上19名 多くが鹿児島出身であるが、うち高見弥一は土佐、堀孝之は長崎の出身である。	『若き薩摩の群像』 『若き薩摩の群像(かごしま文庫1)』 『鹿児島大百科事典』 『日本を変えた薩摩人』 『薩摩藩英国留学生』 『薩摩人とヨーロッパ』
17	五大石橋の名前や歴史について	弘化2(1845)年から嘉永2(1849)年にわたって、肥後の石工、岩永三五郎が招かれて架設。調所広郷の財政改革で、ある程度貯蓄をなしてから薩摩藩が土木工事を始めた。架設にとどまるものではなく、甲突川の改修工事の一環でもあった。新上橋、西田橋、高麗橋、武之橋、玉江橋の順につくられた。	『鹿児島上町の歴史と文化』 『甲突川の五大石橋』 『岩永三五郎と甲突五石橋』 『谷山史談第2号』 『鹿児島大百科事典』
18	西郷隆盛は犬を何匹飼っていたか。	犬は少ない時で2、3頭、多い時で12、3頭いた。愛犬の名前は、クロ、カヤ、ツマ、ツン、ユキ、ハヤ、マツ、シロなどのごく簡単なありふれたものだった。ツンは虎毛の左尾で牡犬、その他黒毛に頭のところだけ白の斑点のある犬といった特徴をもつ犬がいた。	『南洲翁逸話』 『西郷どんと愛犬物語』 『毎日新聞2000年4月20日』
19	奄美の食事のしきたりのようなもので、サンゴンとはどういうものか。	サンゴンとは「三献」のこと。あつ身で正月に食べる、いわゆるおせち料理のことで、三つの膳を準備する。この三つの膳を「三献」という。一の膳が持ちの吸い物、二の膳が刺身、三の膳が豚の吸い物である。	『奄美の暮らしと儀礼』 『新版シマヌジュウリ』 『聞き書き鹿児島島の食事』
20	コサンダケ、ダイミョウダケは方言か。又どの種類の竹をいうのか。	両方とも鹿児島島の方言で、コサンダケはホテイチク、ダイミョウチクはカンザンチクのことである。(ダケ)	『鹿児島植物方言集』 『鹿児島方言大辞典(上)』 『タケ・ササ図鑑』

番号	質問内容	回答	参考資料
21	スペインにサツマという品種の(温州)みかんがあった。いつ海外へ渡ったのか？	1830年、シーボルトによって、ウンシュウの名で初めて紹介される。1876年、ホールが苗木をアメリカに輸出した。ウンシュウミカンの英名であるサツママンダリンは、薩摩国から苗木が出されたため。現在はスペイン・イスラエル・トルコ・オーストラリア・ニュージーランド、アメリカその他の国々に導入されている。	『日本大百科全書22巻』 『The Oxford English Dictionary XIV』
22	鹿児島五社とは、どこをいうのか。	次の五つの神社をいう。①諏訪神社(南方神社)②八坂神社(祇園神社)③稲荷神社④春日神社⑤若宮神社 鹿児島市の上町地区にある五つの神社。島津氏に縁故が深く、昔は正月、五月、九月の五社詣でにぎわった。八坂神社は祇園之洲から平之町に移転した。	『三国名勝図会上巻』 『かごしま歴史散歩』 『わたしたちの清水校区』 『三州昭和12年9月号』『炉辺南国記』 『日本歴史地名大系47鹿児島県の地名』
23	桜島の名前の由来を知りたい。	桜島の名前の由来は諸説ある。 ①桜島忠信が大隅国での任務中、郡司の詠んだ歌が桜島忠信の名とともに世に広まったため、桜島と呼ぶようになった。 ②島の五社大明神社の祭神が木花佐久夜姫であるため、咲夜島と呼んでいたものが訛って桜島に変わった。 ③桜島山が湧出した時に、海に桜の花が浮かんでいたのが桜島と命名した。 ④島には桜の木があり、それが一夜にして突出して山となったので桜島と名付けた。	『三国名勝図会下巻』 『桜島町郷土誌』 『日本歴史地名大系47鹿児島県の地名』
24	おはら節の由来を知りたい。	おはら節の由来は諸説ある。①慶長14(1609)年薩摩軍が琉球に侵攻した際、安久地方(現在の都城市)の足軽たちが戦勝祝いに広めた「安久節」が伊敷・原良に伝わり、「安久節」が「原良節」に変わった。これが花柳界に入って、「原良節」に「小」の時を加え、「小原良節」と呼ばれるようになった。②およそ700年前から歌われており、旧暦3月10日を中心に開かれていた花見会の初日、霧島神宮参拝に行くときに「おはら節」が歌われた。鹿児島市では地ひきに出稼ぐ娘を「おはら女」とよんでいることから、草牟田、原良一帯が歌の発祥地といわれている。③島津安久公が原良に鷹狩りに行った頃、部下の者が唄い始めた。	『かごしま文化百選』 『かごしま文化の表情第7集わらべうた・民謡編』 『伊敷村誌』 『三州昭和32年6月号』
25	城山の西郷隆盛の洞窟の大きさは？	現在は風化し、間口3メートル、奥行4メートル、入口の高さ2.5メートル。西南戦争直後は間口1間(約1.8メートル)、奥行2間(約3.6メートル)	『鹿児島県の歴史散歩』 『鹿児島史跡めぐり』 『鹿児島市内の文化財―指定文化財の解説』

番号	質問内容	回答	参考資料
26	「サツマ」という地名の由来を知りたい。	諸説有り ①「薩摩はサツマの音を表すだけの当て字で字そのものに意味はない。sat(かわいた, ひからびた)ma(半島)というアイヌ語地名の残存説。(「地名語源辞典」) ②「幸浜(サチハマ)」、サ(接頭語)＋ツマ(端)、「サツマ(狭端)」(「日本地名語源事典」) ③得物矢(サツヤ)、幸島(サツシマ)(「大日本地名辞書」)	『地名語源辞典』 『日本地名語源事典』 『大日本地名辞書』
27	西郷隆盛と他に二人の人相書きが出回ったそうだが、他の二人は誰か。(西南戦争後 三人一緒に)	高杉晋作と平野次郎(平野国臣)	『西郷隆盛写真集』 『大西郷の謎』
28	宝暦治水の工事費用はいくらか。	治水工事に使った費用は、およそ40万両の多額にのぼった。40万両とは当時の藩の収入2カ年分に相当した。県の総予算の2カ年分を国営の一土木事業に使ったということになる。	『薩摩義士』 『宝暦治水と薩摩義士』 『宝暦治水・薩摩義士(かごしま文庫)』『さつま今昔』『郷土を興した人』 『南日本新聞H16.8.26(宝暦治水250年 薩摩義士)』
29	現在の鹿児島市立美術館の庭にある石像「じめさあ」について	島津義久の三女亀寿姫は、十八代藩主島津家久夫人である。没後、持明院様(じめさあ)と呼ばれてその石像と伝えられるものが鹿児島市立美術館の前庭の一角に建てられている。幼い時から人質となり、長い間江戸に住み、多くの苦しみや難儀に耐え、思いやりの心の深い方と今日も人々に慕われている。毎年十月五日の命日には石像の化粧直しが行われている。	『島津斉彬の全容』 『郷土婦人の輝き』 『国分郷土誌下巻』 『鹿児島豆百科』 『文学科論集第1号～第2号』
30	錦江湾の名前の由来について、殿様が詠んだ歌が元になっているらしいがどうか。	十八代島津家久が詠んだ「浪のおりかくる錦は磯山の梢にさらす花の色かな」という歌が由来といわれる。	『加治木物語』 『加治木案内』 『黎明館調査研究報告 第21集』 『南日本新聞 H20年6/13朝刊』

番号	質問内容	回答	参考資料
31	篤姫は一門家の生まれといわれるが、一門家とは何か。	一門家とは、薩摩藩主島津家の家臣の中で、最上位の家で、重富(越前)家・加治木家、垂水家、今和泉(和泉)家をいう。	『みんなの篤姫』 『天璋院篤姫』 『薩摩七十七万石』 『鹿児島県郷土系統史』 『鹿児島県史 第2巻』 『鹿児島市史 1』
32	昭和初期頃、少年雑誌の挿絵をかいていた樺島勝一が、鹿児島出身だときいたがどうか。	1888(明治21)年、長崎県諫早生まれ。本名は柊島。 1892(明治25)年、鹿児島市に移転。 1894(明治27)年、鹿児島市立名山尋常小学校入学。 1899(明治32)年、鹿児島市立名山尋常小学校卒業。 1899(明治32)年、鹿児島商業学校に入学。(1902年中退)	『樺島勝一昭和のスーパーリアリズム画集』 『柊島勝一ペン画集』 『さしえの50年』 『昭和物故人名録』
33	加世田から知覧までの鉄道があったようだが、いつくらいの時期にどのようなルートで運行されていたのか。	南薩鉄道の本線(枕崎-伊集院)を、加世田から阿多までの一区間走行し、阿多から南薩鉄道知覧線(阿多-知覧)へ乗り換えて知覧まで向かうルートがあった。本線の加世田-阿多区間は、大正3年5月10日(加世田-伊作開通)~昭和59年3月17日(南薩鉄道廃止)運行。知覧線は昭和5年11月15日に「薩南中央鉄道」として始まり、昭和18年4月22日に南薩鉄道に吸収され知覧線と改称、昭和40年11月15日廃止となった。 ※知覧線詳細:阿多-東阿多-花瀬-薩摩白川-田部田-薩摩川辺-城ヶ崎-知覧	『軌跡 - 南薩鉄道70年』 『線路は続くよ何処までもー。清藤一明が撮り続けた鹿児島の鉄道25年』 『目で見る南薩の100年』 『金峰町郷土史 下巻』 『川辺町郷土史』 『知覧町郷土史』 『加世田市史 上巻』
34	「さつま汁」の由来について知りたい。	江戸時代、薩摩の士風高揚のため催された闘鶏で負けて死んだ方を「さつま汁」にしたのがはじまりといわれている。本来は地鶏の薩摩鶏を用いる。	『鹿児島大百科事典』 『南日本文化史』 『かごしま文化百選』
35	鹿児島市内にある銅像のうち、次の4つの建立された時期と作者を知りたい。①平田靱負(平之町)②調所広郷(天保山町)③岩永三五郎(清水町)④坂本龍馬とおりょう(天保山町)	①平田靱負 昭和29年5月、安藤士ノ作 ②調所広郷 平成10年3月29日、木佐貴熙ノ作 ③岩永三五郎 平成2年10月5日、前迫初実ノ作 ④坂本龍馬とおりょう 昭和55年3月18日、中村晋也ノ作	『鹿児島市内の史跡めぐり』 『南日本新聞 H10年3/30朝刊』 『鹿児島史談 第2号』 『南日本新聞 H2年10/6朝刊』 『鹿児島新報 S55年3/19』

番号	質問内容	回答	参考資料
36	天璋院篤姫の実家、今和泉島津家の今和泉屋敷は薩英戦争時被災したのか。(大河ドラマでは被災した。)	下の資料①に「今和泉屋敷は無難ニテ候…」(被災していない)とある。平田伊兵衛宅や島津出雲屋敷は焼失したこと、又、重富屋敷は二度燃えたが消し止めた等の記述もある。被災屋敷等の数は、資料②に記述がある。	①『薩英戦闘日乗』 ②『鹿児島市史 1』
37	篤姫は、ねこを飼っていたそうだが名前は？	三千姫、サト姫。	『三田村鳶魚全集 No.3』 『天璋院と徳川将軍家101の謎』
38	篤姫が、輿入れした時のルートを知りたい。	薩摩から、久留米、小倉、下関、広島、大阪、京都、宮、新居関、駿府、鎌倉、江戸。	『天璋院 薩摩の篤姫から御台所』
39	イッタンモメンは、高山町(現:肝属町高山)の言い伝えにある妖怪であるが、郷土誌以外に記述してある資料を知りたい。	右の資料のとおり。	『民間伝承 No.4-1』 『南日本新聞 H9年9/2朝刊』 『妖怪談義』 『水木しげるの続妖怪事典』 『南日本新聞 H7年7/5朝刊』 『月刊誌ム-2008年4月号』
40	篤姫の名前の変遷と時期を知りたい。	はじめ 一子、於一 篤…斉彬の養女となったとき…嘉永6年3月10日 敬子…近衛忠熙の養女となったとき…安政3年7月7日 天璋院…家定亡き後…安政5年8月	『天璋院篤姫(徳永和喜/著)』 『天璋院篤姫(寺尾美保/著)』 『鹿児島県史料 斉彬公史料No.3』 『天璋院と徳川将軍家101の謎』 『天璋院篤姫のすべて』
41	小松帯刀(清廉)の墓はどこか。	園林寺跡の小松家墓所(日吉、吉利) ※大阪、天王寺村夕日が丘の墓所から明治9年10月3日に移転・改葬	『幻の宰相小松帯刀伝(平成3年)』『日吉町郷土誌(上巻)』
42	紫原の地名の由来を知りたい。	①田上村、郡元村、宇宿村の境界線が台地を通っており、“村々の境がある野原”ということで、「村境原」とよばれ、それがちぢまって「ムラサキバル」となった。 ②田上村、郡元村、宇宿村それぞれの村の前(先)にある原野と考え村前原」という文字で表していた。 ③以前、戦場であったため、死傷者の血で草や木が紫色に染まったということで「紫原」とよばれるようになった。	『昭和25年以前の鹿児島市内にある主な地名・町名・主な道路名の起こり』 『社会科郷土資料 わたしたちの中郡 改訂版』

番号	質問内容	回答	参考資料
43	名山堀はどの辺りにあったのか。	現在の、みなと大通り公園付近から市役所前を経て、県民交流センターの北隣から海岸の方へ向かってあった。	『鹿児島市の史蹟』 『鹿児島之史蹟』 『鹿児島のおいたち』 『鹿児島市史』 『鹿児島回り灯笼』 『鹿児島城下絵図散歩』 『鹿児島市街実地踏査図 明治30年発行(鹿児島市史Ⅲ 附録地図)』
44	薩摩藩の参勤交替のルートを知りたい。	九州内 (1)西の薩摩街道・長崎街道を北上するルート(途中北薩から船を利用の場合もあり) (2)東の日向街道を北上し、細島(現宮崎県日向市)から船を利用するルート 中国・四国地方 (1)瀬戸内海を船でたどるルート(江戸前期に多い)(2)山陽道陸路でたどるルート(江戸後期に多い) (3)瀬戸内海の途中の港で上陸、残りを山陽道等の陸路でたどるルート 上方から江戸 (1)東海道をたどるルート (2)中山道をたどるルート(3)中山道を少したどり美濃路を経由して東海道に合流するルート	『はるかなり江戸・鹿児島の旅』 『薩摩藩の参観交替』 『歩きたくなる大名と庶民の街道物語』 『薩藩江戸上り道中記』 『旅行細見記(一)・(二)』
45	坂本龍馬が霧島へ新婚旅行をした際に、姉に宛てた手紙はどのような内容のものだったか。また、龍馬の筆跡がわかるような資料はないか。	内容…全文は参考資料①～②参照 「おとめさんへさし上る。(中略)霧島山の方へ行道にて日當山の温泉二止まり(中略)極月四日夜認 乙様 龍馬」 要旨の一部は参考資料③参照 「途中、日当山に泊まり、また塩漬(塩浸)温泉に行く。(以下省略)」 筆跡…参考資料②④を参照	①『坂本龍馬関係文書 第一』 ②『龍馬の手紙』 ③『さんざし(昭和43年1～10月号)』 ④『龍馬を読む愉しさ』
46	徳川光圀に仕えた佐々介三郎が『大日本史』編纂のための史料蒐集で来鹿した際、どのような場所を訪れたか。	九貞享二年(1683)7月7日～7月24日の旅程 水俣(熊本)→米ノ津→和泉(出水)→阿久根→市来→加世田→津貫→坊津→川辺→鹿児島城下→<船>→大隅浜市→福山→岩川→志布志→ 飢肥(宮崎)	『佐々宗淳』 『助さん・佐々介三郎の旅人生』

番号	質問内容	回答	参考資料
47	東郷平八郎(大日本帝国海軍軍人)と東郷茂徳(太平洋戦争開戦時及び終戦時の日本の外務大臣)の家系は、先祖をたどれば親戚関係にあるか。	東郷茂徳は、明治15年12月10日、朴茂徳として苗代川で生まれた。東郷茂徳の先祖は朝鮮からの帰化の家系であり、明治19年9月6日、朴家は姓を東郷と改め、平民から士族の身分に移った。朴家が「入籍」した東郷家と東郷平八郎の系図を見るかぎり親戚関係にはない。	『東郷茂徳一伝記と解説一』 『東郷元帥一族傳記』
48	明治13年から日本で教鞭をとったベルリン生まれの獣医学者ヤンソン先生:Dr. Johannes Ludwig Janson(1849. 1. 9—1914. 10. 28)がいた。 1. 妻は、鹿児島出身の女性だったらしい。ほんとうか。 2. 一家は鹿児島に住んだことがあったか。	1. 名前は、ヤンソン春子(旧姓 谷山)。鹿児島藩士谷山仲左衛門の娘。 2. 鹿児島市池之上町には、ドイツ人のヤンソン一家が住んでいた。ヤンソンは明治13年に来日して以来、東京駒場の農学校、帝大、農科大などで教えた功労者だった。老後ドイツに帰国していた。しかし、日本がなつかしく、鹿児島に再来日していた。	『鹿児島百年 下』 『郷土人系 上巻』
49	古代(奈良時代)、太宰府に薩摩(大隅)が紫草の紫根か種子を献上していたことについて知りたい。	平安時代の法規集成の一つである『延喜式』によると、太宰府から献上する物品のなかに、「紫草」がある。 紫草については、「大隅一千八百斤」とあり、染料としてこの国に定められた数量が割り当てられていたことがわかる。	『南九州古代ロマン』
50	島津義弘は関ヶ原の戦いで敗れたが、敵の正面を打ち破って薩摩へ逃げ帰ったといわれている。島津義弘を祀ってある妙円寺詣りの起原について教えて欲しい。	起原についてははっきりしない。伝えるところによると、関ヶ原合戦後、鹿児島城下の若侍たちは、毎年、関ヶ原合戦に参加した武士から、的中突破の話聞き、士気昂揚に努めていた。 9月14日は、島津義弘が大垣城より関ヶ原へ移動した日の夜を期し、昼の勤めを終えた後、妙円寺(義弘の木像が安置されている寺)に、鎧兜に身を固め参拝し、翌日は平常どおり勤務したと伝えられる。	『伊集院町誌』
51	島津藩の時代に、ガラスの原料を高隈山から採取していたらしいが、その記述はあるか。	ガラス製造のためのもっとも基本的な珪酸原料である白石(石英)は、薩摩の場合高隈山から採石し、垂水から運び出されていたとみられる。	『薩摩切子』 『江夏十郎関係文書』(鹿児島県史料集33) 『垂水市誌 上巻』 『鹿児島県地下資源概観』

番号	質問内容	回答	参考資料
52	西鹿児島駅(現・鹿児島中央駅)の外観がわかる写真がみたい。	下記資料のとおり ①大正3年の武駅と呼ばれた頃 ②昭和5年当時の西鹿児島駅 ③平成8年の旧駅舎(西鹿児島駅)と新駅舎(鹿児島中央駅)	①『写真集 明治大正昭和 鹿児島』 ②『目で見る鹿児島市の100年』 ③『線路は続くよ何処までも一。』
53	方言で白和えのことを「よごし」というが、その由来は？	古式ゆかしい女房詞(女中言葉)である。味噌ないし胡麻でまぶして一見よごしてあるところから。	『さつま語の由来』 『鹿児島方言大辞典 下巻』
54	鹿児島の郷土菓子である、春駒の由来を知りたい。	もともとは高橋八郎種美という人が新照院町で作ったもので、新照院餅といった。当時の藩主、島津重豪公が西田町に西田座を設け、上演中にこの餅を売ったところ、人気を博した。その後この餅をまねたものができ、「シンシンの馬ンマラ」と呼ばれた。島津久光公が指宿に出かけたときにこのお菓子が出て、「名前が良くないので、春駒という名前にしよう」ということになり、それ以来春駒と呼ばれるようになったといわれる。	『草牟田校区史蹟集』 『かごしまの味』 『三州談義 第4巻第10号 No.30(昭和35年10月号)』 『三州 昭和43年7・8月号合併』
55	県内の小学校に椋鳩十文庫が置かれるようになったいきさつを知りたい。	正しくは、「南日本まつかぜ文庫」という。南日本新聞社が創立110周年記念読者還元事業で、県内の小学校に椋鳩十全集を贈る「心の扉をたたく贈本運動 南日本まつかぜ文庫」を昭和63年から始めた。南日本新聞社と南日本新聞販売店連合会が県内全小学校611校を対象に贈り、平成3年に終了した。	『南日本新聞の百二十年』 『南日本新聞 平成3年2月8日「最後を飾り大丸小 川辺へ 南日本まつかぜ文庫 全小学校に贈本」』
56	大東亜戦争時、軍神と呼ばれた入佐少将とはどんな人物だったのか。	名前は入佐俊家、明治35年4月26日生まれ。出身地については諸説あり、上福元町(①)または上竜尾町(②)である。鹿児島県立第二中学校を卒業後、海軍兵学校に入学、のちに霞ヶ浦の海軍航空隊に入る。入佐は海軍航空隊の至宝であり、源田実の戦闘機と入佐の爆撃機はその双壁として航空隊を背負っていた。入佐の指揮する海軍航空隊は、数々の殊勲をたて米蘭連合艦隊を撃滅したとき、海軍中佐の階級であったが、異例の単独拝謁を賜った。昭和19年6月19日、マリアナ海域での決戦で空母大鳳が沈没、大鳳飛行長だった入佐は戦死。戦功により二階級昇進し、海軍少将となる。寡黙沈勇で、薩摩隼人の気質そのままであったといわれている。	『谷山市誌』…① 『君故山に冥れ』 『悲しき太平洋』 『日本海軍史 9巻』…② 『中攻』